

編集後記

-- 2 --

雑穀と民族との関係を研究する民族植物学者を称するのなら、自然としての植物の調査・実験研究のみではなく、文化としての民族とは何か、さらに言語、宗教、地理や歴史との関わりをも問う必要がある。雑穀については、これに人間集団における職業や階層、ジェンダーなどの差別構造も影響してくる。全体として雑穀の起源と伝播から、その文化複合までを見通すためには、自らの能力が及ばないことを自覚していても、これらすべてを論考に組み込まねばならない。

たとえば、柳田国男の稲作単一民族説がどのような背景で唱えられ、雑穀を貶めるような影響を与えてきたのか。官僚として高い地位にいた彼が、稲作単一民族説によって農業経済政策をどのように誘導したのか。この謎を解くためには、部分的に黙秘している柳田の経歴をふまえながら、推測するしかない。彼は天正天皇即位の際に大嘗会を取り仕切り、敗戦後は枢密顧問官であった。枢密顧問官は憲法制定にも関与できたので、何らかの影響を与えた（不明）とするなら、民族論、宗教論、憲法論も考察の範疇にいれねばならないと考えた。

いよいよ2019年は、この国にとっても大変な歴史の分岐点になるのだろう。この数年の政府の動きを見てきて、つくづく思うのは、立法に誠志、行政に情理、司法に公正を求めたいということである。また、科学と経済の動向は、バベルの塔の崩壊から最後の審判に至らないように、暗い未来を回避し、希望を紡ぐために、今、学び考え、必ず行動することを求めているようだ。

私は古希を迎えて遊行の徒になり、まず個人として家族を守り、次に地域社会が崩れないように自らできることは、自らのフィールド調査の記録を振り返って、せめて率直な見解を書き綴ることしかない。先真文明への移行が生き物たちにとって、これ以上の犠牲が少なく、できる限り穏やかであることを願うばかりだ。生物文化多様性の大切さを多くの方々に理解してほしい。野生生物が動・植物園以外には生息していなくなり、博物館に収まってしまい、人間と家畜だけになってしまった地球も、AIに支配された隷従人間になるのもご免である。

民族植物学には、植物の生物多様性保全は主要テーマだが、伝統的知識体系、環境学習原論、そして民族や地域文化も重要だ。最先端やグローバルという言葉に幻惑されず、地道な暮らしを見つめて、過剰な利便性やその結果としての虚無に、ファンタジックに抗うことだ。家族や地域が堅固であれば、人間は大丈夫だ。先真文明に向けて、人間が冷静に文化的な共生進化を継続することを願う。

木俣美樹男
(2018.12.25)

